

梵文和訳『阿毘達磨集論』(5)

阿毘達磨集論研究会

研究会代表者	那須良彦 (社会福祉法人金剛樹心会理事長)		
研究会メンバー	加納和雄 (駒沢大学准教授)	李 学竹 (中国蔵学研究中心宗教研究所教授)	
	吉田 哲 (龍谷大学准教授)	松下俊英 (大谷大学非常勤講師)	
	早島 慧 (龍谷大学准教授)	横山 剛 (岐阜大学高等研究院特任助教)	
	高務祐輝 (龍谷大学非常勤講師)	間中 充 (龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員)	
	吹田隆徳 (佛教大学大学院生)	田中裕成 (佛教大学大学院生)	
	奥野自然 (龍谷大学大学院生)	中山慧輝 (日本学術振興会特別研究員 DC2)	
	向田泰真 (大谷大学大学院生)		

はじめに

本稿は、阿毘達磨集論研究会[2019]の続編であり、『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccaya*)とその注釈『阿毘達磨集論釈』(*Abhidharmasamuccayabhāṣya*)の梵文テキストを再校訂し、その和訳を試みるものである。前稿と同様に両論書の和文完訳が未刊行である点、および、新たに確認された『阿毘達磨雜集論』(**Abhidharmasamuccayavyākhyā*)の梵文写本の読みを踏まえた梵文の再検討が必要である点、主にこの二点を理由に、その梵本再校訂と和訳を目指す。

本稿に収録する部分は、第一篇「本事分」の第一章「三法」中の「建立」における、「行蘊建立」の一部である。「行蘊建立」全体は心所法と心不相応行とから成るが、その中で本稿が収めるのは心不相応行の箇所にあたる。そこにおいて、心不相応行は諸法の諸々の状態に対して命名するものとされ、全ては名称としての存在(仮有)であると説明される。そのため、心不相応行のそれぞれを「よりどころ」「自性」「名称」等の観点から解説する。

研究会では、代表者である那須良彦が下訳と注を準備し、加納和雄をはじめとする班員がそれを検討するという仕方で作業を進めた。梵文原典の校訂は、李学竹の全面的な協力によりなし得た。

校訂と訳について

本稿で提示する『阿毘達磨集論』の梵文校訂テキスト(暫定版)は、ゴーカーレーの刊本およびその原本たる梵文写本(写本影印 Göttingen Xc 14/23–24 (a))を使用)と、梵文『阿毘達磨雜集論』から回収される対応箇所(Li [2017] 所掲梵本翻刻)とを対校したものである。プ

ラダンによる還梵テキストは参照するに留めた。また、『阿毘達磨集論釈』も同様に、タティアの刊本およびその原本たる梵文写本（写本影印 Göttingen Xc 14/23–24 (b)）を使用）と、梵文『阿毘達磨集論』から回収される対応箇所（Li [2017] 所掲梵本翻刻）とを対校した校訂テキストを提示した。

本稿の校訂テキストにおいて、異読や訂正は適宜注記したが、写本特有の綴り字や連声の標準化、アヴァグラハの追加、および分節の添削については煩を避けるため逐一報告しない。『阿毘達磨集論釈』において太字で示した箇所は、『阿毘達磨集論』の本文を指す。

訳語に関して、個別の法の名称は術語（テクニカルターム）として理解して伝統的な漢訳（主に玄奘の訳語）を充て、それ以外は、現代表現（とくに和語）を用いた。そして必要に応じて、現代表現に対応する伝統的漢訳表現や梵文の原語を丸括弧で補った。

本稿で提示するテキストには諸法の定義が列挙され、それぞれの定義にはアビダルマや唯識の諸文献において各々対応する箇所が存在する。本来ならばその対応箇所を逐一報告する必要があるが、その作業はすでに『瑜伽行派の五位百法』をはじめとするパウツダコーシャシリーズにおいて網羅的になされている。そのため、本稿においては、作業の重複を避け、パウツダコーシャの該当箇所への言及によって、それに代えた。なお、『五蘊論』安慧釈（PSkV）の梵文については、『瑜伽行派の五位百法』以後に出版されたため、該当箇所のみを適宜示す。

凡例

本稿では梵文テキストと和訳を見開きで提示する。提示する梵文テキスト並びにその中で使用した記号は、Li [2017] の提示する校訂テキストに従う。三角 △ は、梵文写本における改行位置を示す。

科段

- 1.1.5.1.4.2 心不相応行
 - 1.1.5.1.4.2.1 得
 - 1.1.5.1.4.2.2 無想定
 - 1.1.5.1.4.2.3 滅尽定
 - 1.1.5.1.4.2.4 無想異熟
 - 1.1.5.1.4.2.5 命根
 - 1.1.5.1.4.2.6 衆同分
 - 1.1.5.1.4.2.7 生
 - 1.1.5.1.4.2.8 老
 - 1.1.5.1.4.2.9 住
 - 1.1.5.1.4.2.10 無常性
 - 1.1.5.1.4.2.11 名身
 - 1.1.5.1.4.2.12 句身
 - 1.1.5.1.4.2.13 文身
 - 1.1.5.1.4.2.14 異生性
 - 1.1.5.1.4.2.15 流転
 - 1.1.5.1.4.2.16 定異
 - 1.1.5.1.4.2.17 相応
 - 1.1.5.1.4.2.18 勢速
 - 1.1.5.1.4.2.19 次第
 - 1.1.5.1.4.2.20 時
 - 1.1.5.1.4.2.21 方
 - 1.1.5.1.4.2.22 数
 - 1.1.5.1.4.2.23 和合
 - 1.1.5.1.4.2.24 心不相応行の総括 (ASBh のみ)

1.1.5.1.4.2 心不相応行

【AS】 AS-Ms 5r4–5 (Gokhale 18.20–22) , ASVy-Ms 18r1–3 (Li [2017: 232.13–16]) , cf. 早島 74.

cittaviprayuktāḥ saṃskārāḥ katame. prāptir asaṃjñīsamāpattir nirodhasamāpattir
 āsaṃjñīkaṃ jīvitendriyaṃ nikāyasabhāgo⁽¹⁾ jātir jarā sthitir anityatā nāmakāyāḥ
 padakāyā vyañjanakāyāḥ prthagjanatvaṃ pravṛttiḥ pratiniyamo yogo javo 'nukramaḥ
 kālo deśaḥ saṃkhyā sāmāgrī ca.

【ASBh】 ASBh-Ms 11r1–2 (Tatia 9.7–10) , ASVy-Ms 18r3–4 (Li [2017: 232.17–20]) , cf. 早島 75–77.

cittaviprayuktānāṃ saṃskārānāṃ adhiṣṭhānataḥ⁽²⁾ svabhāvataḥ prajñaptitāś ca nir-
 deśo veditavyaḥ. asaṃjñīsamāpattinirodhasamāpattī bhūmito 'pi niḥsaraṇavihārasaṃjñā-
 pūrvakābhyāṃ manaskārābhyāṃ api nirdiṣṭe. āsaṃjñīkaṃ manaskāravarjyair ebhir eva.
 śeṣā adhiṣṭhānādibhis tribhir eva.

(1) -sabhāgo] ASVy-Ms, -sabhāgatā AS-Ms. (AS および ASBh では、衆同分として nikāyasabhāga が用いられるため ASVy の読み方に従った。ただし、一般的なアビダルマ文献では nikāyasabhāgatā が用いられる。)

(2) adhiṣṭhānataḥ] ASVy-Ms. ASBh-Ms は、写本の右端部分の画像が切れており、adhiṣṭhānataḥ は画像の上では確認できない（写本が物理的に破損しているわけではない）。行末は saṃskārānāṃ a で終わっているように見える。次の行頭は svabhāvataḥ から始まっているため、adhiṣṭhānataḥ の 4 音節は撮影範囲に含まれていない写本右側欄外に補筆されていた可能性がある。

1.1.5.1.4.2 心不相応行

【問】心不相応行とは何か。【答】得・無想定・滅尽定・無想異熟⁽³⁾・命根・衆同分・生・老・住・無常性・名身・句身・文身・異生性・流転・定異・相応・勢速・次第・時・方・数・和合である。

諸々の心不相応行については、よりどころという観点から⁽⁴⁾、自性という観点から⁽⁵⁾、名称（仮設）という観点から⁽⁶⁾説示していると理解されるべきである。無想定と滅尽定は、地（禪定段階）という観点からも、出離と止住の想念を〔それぞれ〕前提とする作意という観点からも説示される。無想異熟は、作意という観点を除外した、同じ観点（地・よりどころ・自性・名称）から〔説示される〕。残り〔の心不相応行〕は三つの観点（よりどころ・自性・名称）のみから〔説示される〕。

(3) 原文は āsaṃjñika であり、異熟に対応する語はないが、漢訳にしたがった。

(4) ここでの「よりどころ」は、命名される状態を成立させる「よりどころ」を意味する。

(5) ここでの「自性」は、心不相応行末尾の 1.1.5.1.4.2.24 「心不相応行の総括」を踏まえると、状態 (avasthā) を意味すると考えられる。

(6) prajñāpti の訳については、「仮の設定」「名付け」「表示」「表現」なども考えられるが、1.1.5.1.4.2.1 「得」に対する ASBh の説明箇所では ity ucyate という表現があり、また、1.1.5.1.4.2.21 「方」に対する ASBh の説明箇所では deśopacāraḥ という表現があることから、prajñāpti を「名称」と訳した。ただし、その名称に対応する実体が存在することを認めているわけではない。阿毘達磨集論研究会 [2017: 62–63] の 1.1.5.1.4 「行蘊の設定」における ASBh 参照。

1.1.5.1.4.2.1 得

【AS】 AS-Ms 5r5 (Gokhale 18.22–23) , ASVy-Ms 18r4–5 (Li [2017: 232.21–22]) , cf. 早島 74.

Vy 18r5 prāptiḥ katamā. kuśalākuśalāvyākṛtānām⁽⁷⁾ dharmāṇām ācayāpacaye⁽⁸⁾ prāptiḥ
pratilambhaḥ samanvāgama iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11r3–4 (Tatia 9.11–14) , ASVy-Ms 18r5–v1 (Li [2017: 232.23–27]) , cf. 早島 75.

Bh 11r3 tatra kuśalākuśalāvyākṛtānām⁽⁹⁾ dharmāṇām ity adhiṣṭhānanirdeśaḥ. ācayā-
Vy 18r6 pacaya iti svabhāvanirdeśaḥ. tathā hy ācaye saty adhimātraiḥ⁽¹⁰⁾ śraddhādibhiḥ samanv-
Bh 11r4 āgama⁽¹¹⁾ ity ucyate. apacaye sati mṛdubhir iti. prāptiḥ pratilambhaḥ⁽¹²⁾ samanv-
Vy 18v1 āgama⁽¹³⁾ iti prajñaptir iti prajñaptinirdeśaḥ. evam anyeṣv api yathāyogaṃ yojayi-
tavayam.

1.1.5.1.4.2.2 無想定

【AS】 AS-Ms 5r5–6 (Gokhale 18.23–25) , ASVy-Ms 18v1–2 (Li [2017: 232.28–233.2]) , cf. 早島 74.

AS 5r6 asaṃjñīsamāpattiḥ katamā. śubhakarṣnavītarāgasyoparyavītarāgasya niḥsaraṇa-
Vy 18v2 saṃjñāpūrvakeṇa manasikāreṇāsthāvarāṇām⁽¹⁴⁾ cittacaitasikānām dharmāṇām nirodhe
’saṃjñīsamāpattir⁽¹⁴⁾ iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11r4–7 (Tatia 9.15–19) , ASVy-Ms 18v2–4 (Li [2017: 233.3–7]) , cf. 早島 75.

Bh 11r5 śubhakarṣnavītarāgasyeti tṛtīyadhyānavītarāgasya. uparyavītarāgasyeti
Vy 18v3 caturthadhyānavītarāgasya. niḥsaraṇasaṃjñāpūrvakeṇeti mokṣasaṃjñāpūrvakeṇa.
Bh 11r6 asthāvarāṇām iti pravṛttivijñānasamgrhītānām.⁽¹⁵⁾ nirodha iti samāpatticittakṛtaḥ
Vy 18v4 kālāntaram asthāvaracittacaittasamudācāranirodhy⁽¹⁶⁾ āśrayasyāvasthāviśeṣaḥ. nirudhy-
Bh 11r7 ate ’neneti kṛtvā.

(7) kuśalākuśalāvyākṛtānām] ASVy-Ms, kuśalākuśalānām AS-Ms.

(8) dharmāṇām ācayāpacaye] ASVy-Ms, dharmāṇām sācayāpacaye AS-Ms.

(9) kuśalākuśalāvyākṛtānām] ASVy-Ms, kuśalākuśalānām AS-Ms.

(10) ācaye saty adhimātraiḥ] ASVy-Ms, ācaye ’dhimātraiḥ ASBh-Ms.

(11) samanvāgama] ASVy-Ms, samanvāgata ASBh-Ms.

(12) pratilambhaḥ] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

(13) samanvāgama] em. (Cf. AS-Ms), samāgama ASBh-Ms, ASVy-Ms.

(14) nirodhe ’saṃjñīsamāpattir] AS-Ms, nirodhai asaṃjñīsamāpattir ASVy-Ms.

(15) pravṛttivijñānasamgrhītānām] ASBh-Ms, pravṛttivijñānasamsamgrhītānām ASVy-Ms. ASBh-Ms は、写本の右端部分の画像が切れている境に tti と思われる 1 音節が確認されるか。

(16) -nirodhy] ASBh-Ms, -virodhī ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.2.1 得

【問】得とは何か。【答】善・不善・無記⁽¹⁷⁾なる諸法が増大したり減少したりすることに対して⁽¹⁸⁾、「得」「獲得」「具備 (samanvāgama 成就)」という名称がある⁽¹⁹⁾。

そのうち「善・不善・無記なる諸法が」とは、よりどころという観点からの説示である。「増大したり減少したりすることに対して」とは、自性という観点からの説示である。すなわち、「善なる諸法が」増大している時には、「勝れた信などを具備している」と言われ、減少している時には、「劣った〔信などを具備している〕と〔言われる〕。「『得』『獲得』『具備』という名称がある」とは、名称という観点からの説示である。同様に、他〔の心不相応行〕についても、適宜〔よりどころ・自性・名称などの観点について〕適用されるべきである。

1.1.5.1.4.2.2 無想定

【問】無想定とは何か。【答】遍淨〔天〕からは離染しているが、上〔地〕からは未だ離染していない者が、出離する想念を前提とする作意によって⁽²⁰⁾、断続的な (asthāvara) 心・心所法を抑止することに対して、「無想定」という名称がある⁽²¹⁾。

「遍淨〔天〕からは離染している」とは、第三静慮からは離染しているということである。「上〔地〕からは未だ離染していない者が」とは、第四静慮からは未だ離染していない者がということである。「出離する想念を前提とする」とは、解脱の想念を前提とすることである。「断続的な〔心・心所法〕」とは、転識に含まれる〔心・心所法〕である。「抑止すること (nirodha)」とは、精神集中の心 (定心) によってもたらされ、しばらくの間、断続的な心・心所法が顕在化すること (現行) を抑止するもの (nirodhin) であって、所依 (āśraya) 〔つまりアーヤ識〕の特定の状態のことである。「これによって抑止される (nirudhyate)」というわけで〔、手段の意味で「抑止すること (nirodha)」と呼ばれる〕。

(17) AS, ASBh は「善・不善」とするが、それぞれの漢訳とチベット語訳および ASVy では「善・不善・無記」となっている。ここでは、『瑜伽師地論』(T [30] 587a10–20) 等の瑜伽行派の文献を参考に、「善・不善・無記」と理解した。瑜伽行派の「得」の理解については、早島 [1992] に詳しい。また、『入阿毘達磨論』(T [28] 986a28–b2) でも「得」の解説の際には「善・無記・不善」となっている。

(18) ここでの ācayāpacaye は、ASBh の心不相応行の末尾に付された総論において、ācayāpacayāvasthā と説明されているので、「増大したり減少したりしている状態」と考えられる。以下の心不相応行法に関しても同様に「状態」を意味している。

(19) 他の論書の得の定義は、BK-I 156–158、BK-II 215–218、BK-III 208–211、BK-IV 232–235、BK-V 71–72、BK-VI 105–106、PSkV 75.6–76.2 参照。

(20) 「出離する想念を前提とする作意」とは、「この無想定こそが出離することであるという思い込みが先立って起こる作意」を意味すると理解した。Cf. AKBh ad k. II-42b.

(21) 他の論書の無想定の定義は、BK-I 167–169、BK-II 228–232、BK-III なし、BK-IV 246–249、BK-V 79–80、BK-VI 114–115、PSkV 76.3–77.13 参照。

1.1.5.1.4.2.3 減尽定

【AS】 AS-Ms 5r6–7 (Gokhale 18.25–27) , ASVy-Ms 18v4–5 (Li [2017: 233.8–10]) , cf. 早島 78.

nirodhasamāpattiḥ katamā. ākiñcanyāyatanavītarāgasya bhavāgrād uccalitasya śānta-
(22) vihārasaṃjñāpūrvakeṇa manasikāreṇāsthāvarāṇāṃ citta-caitasikānāṃ dharmāṇāṃ
tadekadyānāṃ ca sthāvarāṇāṃ⁽²³⁾ nirodhe nirodhasamāpattir iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11r7–v1 (Tatia 9.19–23) , ASVy-Ms 18v5–6 (Li [2017: 233.11–14]) , cf. 早島 79.

nirodhasamāpattāḥ uparyavītarāgasyety avacanāṃ bhavāgravītarāgasyārhaṭo 'pi
tatsambhavāt. **tadekadyānāṃ ca sthāvarāṇāṃ** iti kliṣṭamanasamgrhītānāṃ.

ete ca samāpattī bhūmito manaskārato 'dhiṣṭhānataḥ svabhāvataḥ prajñaptitaś ca
nirdiṣṭe.⁽²⁴⁾

1.1.5.1.4.2.4 無想異熟

【AS】 AS-Ms 5r7 (Gokhale 18.27–28), ASVy-Ms 19r1 (Li [2017: 233. 15–16]), cf. 早島 78.

āsaṃjñikam katamat. asaṃjñisattveṣu deveṣūpapannasyāsthāvarāṇāṃ citta-
caitasikānāṃ dharmāṇāṃ nirodha āsaṃjñikam iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v1 (Tatia 9.22–23), ASVy-Ms 19r1 (Li [2017: 233.17]), cf. 早島 79.

āsaṃjñikam manaskāravajair ebhir eva. śeṣā adhiṣṭhānādibhis tribhir eva.

(22) bhavāgrād uccalitasya śānta-] em., bhavāgrād uccalitasya śānta- AS-Ms, om. ASVy-Ms, bhavāgrād calitasya śānta- Gokhale. Cf. 堀内 [2018: 25–26] .

(23) citta-caitasikānāṃ dharmāṇāṃ tadekadyānāṃ ca sthāvarāṇāṃ] em. cf. AS-Tib. ASVy-Tib. 『集論』 『雜集論』, citta-caitasikānāṃ dharmāṇāṃ AS-Ms, citta-caitasikānāṃ tadekadyānāṃ ca sthāvarāṇāṃ ASVy-Ms.

(24) nirdiṣṭe] ASBh-Ms, nirdeṣṭe ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.2.3 滅尽定

【問】滅尽定とは何か。【答】無所有処から離染した者（不還）、〔或いは〕有頂から離れた者（離染した阿羅漢）が、寂靜に留まる想念を前提とする作意によって⁽²⁵⁾、断続的な心・心所法と一部の永続的な〔心・心所法〕⁽²⁶⁾を抑止することに対して「滅尽定」という名称がある⁽²⁷⁾。

滅尽定については「有頂から離れた者が」と説いており、無想定のように「上〔地〕からは未だ離染していない者が」と説いていないのは、有頂から離染した阿羅漢にも、それ（滅尽定）があり得るからである。「一部の永続的な〔心・心所法〕」とは、染汚意に含まれる〔心・心所法〕である。

そして以上の二つの定（無想定・滅尽定）は、地という観点から、作意という観点から、よりどころという観点から、自性という観点から、名称という観点から説示される。

1.1.5.1.4.2.4 無想異熟

【問】無想異熟（無想定の結果）とは何か。【答】無想有情天に生まれた者が、断続的な心・心所法を抑止することに対して、「無想異熟」という名称がある⁽²⁸⁾。

無想異熟は、作意という観点を除外した、同じ観点（地・よりどころ・自性・名称）から〔説示される〕。〔以下の〕残り〔の心不相応行〕は三つの観点（よりどころ・自性・名称）のみから〔説示される〕。

⁽²⁵⁾ 「寂靜に留まる想念を前提とする作意」とは、「この滅尽定こそが寂靜に留まることであるという思い込みが先立って起こる作意」を意味すると理解した。

⁽²⁶⁾ 「一部の」(tadekatyānām, cf. 『集論』『雜集論』：一分) に関しては、永続的な心・心所法がアーヤ識と染汚意を指し、一部とは染汚意を指すと理解した。

⁽²⁷⁾ 他の論書の滅尽定の定義については、BK-I 170–172、BK-II 233–234、BK-III なし (nirodha 212–215)、BK-IV なし、BK-V 250–253、BK-VI 116–117、PSkV 77.14–80.3 参照。

⁽²⁸⁾ 他の論書の無想異熟の定義は、BK-I 164–166、BK-II 238–241、BK-III なし、BK-IV 242–245、BK-V 84–85、BK-VI 112–113、PSkV 80.4–81.1 参照。

1.1.5.1.4.2.5 命根

【AS】 AS-Ms 5r7 (Gokhale 18.28–29) , ASVy-Ms 19r1–2 (Li [2017: 233.18–19]) , cf. 早島 78.

Vy 19r2 jīvitendriyaṃ katamat. nikāyasabhāge pūrvakarmāviddhe sthitikālaniyama āyur iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v1–2 (Tatia 9.24–26) , ASVy-Ms 19r2–3 (Li [2017: 233.20–22]) , cf. 早島 79.

Bh 11v2 **nikāyasabhāga** ekajanmikaḥ skandhasantānaḥ. **sthitikālaniyama** iyantaṃ kālam
Vy 19r3 anenāsmīn nikāyasabhāge 'vasthātavyaṃ varṣasataṃ varṣasahasraṃ veti, karmakṛtaḥ
sāmarthyaviśeṣaḥ.

1.1.5.1.4.2.6 衆同分

【AS】 AS-Ms 5r7–v1 (Gokhale 18.29–31) , ASVy-Ms 19r3–4 (Li [2017: 233.23–24]) , cf. 早島 78.

AS 5v1 nikāyasabhāgaḥ katamaḥ. teṣāṃ teṣāṃ sattvānāṃ tasmīṃs tasmin sattvanikāya
Vy 19r4 ātmabhāvasadrśatāyāṃ nikāyasabhāga iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v2–3 (Tatia 10.1–2) , ASVy-Ms 19r4 (Li [2017: 234.1–2]) , cf. 早島 79.

Bh 11v3 **tasmīṃs**⁽²⁹⁾ **tasmin sattvanikāya** iti devamanuṣyādiṣu sattvajātiṣu.⁽³⁰⁾ **ātmabhāva-**
sadrśatāyāṃ ity ekajātīyatāyām.

⁽²⁹⁾ tasmīṃs] ASBh-Ms, tasmi ASVy-Ms.

⁽³⁰⁾ devamanuṣyādiṣu sattvajātiṣu] ASBh-Ms, devamanuṣyādisattvajātiṣu ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.2.5 命根

【問】命根とは何か。【答】前〔世〕の業によって投げ込まれた（設けられた）、〔ある特定の〕衆同分において留まっている時間の制限（長さ）に対して、「寿命」⁽³¹⁾という名称がある⁽³²⁾。

「衆同分」とは一生分の蘊の相続である⁽³³⁾。「留まっている時間の制限（長さ）」とは、「百年間であれ、千年間であれ、その限りの時間、この者はこの衆同分に留まるはずである」という〔制限〕であって、〔前世の〕業によってもたらされた特定の効力である。

1.1.5.1.4.2.6 衆同分

【問】衆同分⁽³⁴⁾とは何か。【答】それぞれの有情が、それぞれの有情のグループ（種類、*sattvanikāya*）の中で、自己存在（*ātmabhāva*）⁽³⁵⁾に関して類似していること（*sadr̥śatā*）に対して⁽³⁶⁾、「衆同分」という名称がある⁽³⁷⁾。

「それぞれの有情のグループ（種類）の中で」とは、天や人などの有情の種類の中で、である。「自己存在に関して類似していることに対して」とは、種類が同一であることに対してである。

⁽³¹⁾ 原語 *āyur* に対して、チベット語訳は *tshe*、『雑集論』は「寿命」とするが、『集論』では「命根」となっている。

⁽³²⁾ 他の論書の命根の定義は、BK-I 173–174、BK-II 219–221、BK-III 216–218、BK-IV 254–256、BK-V 73–74、BK-VI 118、PSkV 81.2–82.1 参照。

⁽³³⁾ “*nikāyasabhāga ekajanmikaḥ*”における *nikāyasabhāga* が Nom. であるか Loc. であるかは検討の余地がある。Nom. で理解した場合は、「衆同分は一生分の蘊の相続である」という意味であり、ASVy-Tib. はこれを支持する。Loc. で理解した場合は「衆同分において、一生分の蘊の相続がある」という意味となる。ただし、後者においても PSkV の内容をふまえると、その衆同分も一生分の蘊の相続であることに変わりない。ここでは、Nom. と理解した。

⁽³⁴⁾ 衆同分とは、有情のグループ（種類）ごとの共通性を意味する。なお、瑜伽行派の衆同分については、櫻井〔2001〕を参照。

⁽³⁵⁾ *ātmabhāva* について、PSkV では五取蘊あるいは四無色蘊を本体とするものと解説していることを踏まえて、ここでは単なる身体とは理解せず「自己存在」と訳した。Cf. PSkV 82.4–5.

⁽³⁶⁾ *sattvānām* は *sadr̥śatāyām* に係るものとして理解したが、その前分の *ātmabhāva* に係っている可能性も考えられる。『顯揚論』T [31] 484b12（衆同分者、謂諸有情互相似性）ならびに VinSg D zhi 73a7, P zi 77a1 (*sems can 'dra ba'i gnas skabs la'o*) は前者の理解を支持し、PSkV 82.3–4 (*teṣām ātmeti bhāvo yatra, sa sattvānām ātmabhāvaḥ*) は後者の理解を支持する。

⁽³⁷⁾ 他の論書の衆同分の定義については、BK-I なし、BK-II 222–224、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 75–76、BK-VI なし、PSkV 82.2–8 参照。なお、同分 (*sabhāgatā*) の定義については、BK-I 161–163、BK-IV 239–240、BK-VI 109–111 参照。

1.1.5.1.4.2.7 生

【AS】 AS-Ms 5v1 (Gokhale 18.31) , ASVy-Ms 19r4–5 (Li [2017: 234.3–4]) , cf. 早島 78.

Vy 19r5 jātīḥ katamā. nikāyasabhāge saṃskārāṇām abhūtva bhāve jātir iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v3–4 (Tatia 10.3–5) , ASVy-Ms 19r5–6 (Li [2017: 234.5–7]) , cf. 早島 79.

Bh 11v4 bāhyasyāpi rūpasya jātimattve⁽³⁸⁾ nikāyasabhāgamātragrahaṇam⁽³⁹⁾ sattvasantāne
Vy 19r6 lakṣaṇaprajñaptijñāpanārtham. bāhyam hi rūpaṃ saṃvartavivartaprabhāvitam,
ādhyātmikās tu saṃskārā⁽⁴⁰⁾ jātijarādiprabhāvitā iti.

⁽³⁸⁾ jātimattve] ASBh-Ms, jātimatvaṃ ASVy-Ms.

⁽³⁹⁾ nikāyasabhāgamātragrahaṇam] ASBh-Ms, nikāyasabhāgasyātragrahaṇam ASVy-Ms.

⁽⁴⁰⁾ tu saṃskārā] ASVy-Ms Tatia, tu ASBh-Ms. Cf. ASBh-Tib. ASVy-Tib.: nang gi 'du byed, 『雑集論』：内諸行.

1.1.5.1.4.2.7 生

【問】生（誕生）とは何か。【答】衆同分において、諸行が〔かつて〕存在せず（abhūtvā）〔今〕存在すること（bhāva）に対して、「生」という名称がある⁽⁴¹⁾。

外界の色も生を有するけれども、ただ衆同分にのみ言及するのは、有情の相続に対して〔のみ、生という〕特徴を命名⁽⁴²⁾していると知らしめるためである。なぜならば、外界の色は〔世界の〕帰滅（saṃvarta）と生成（vivarta）によってあきらかにされる（prabhāvita）が、内的な諸行（有情の相続）は生や老などによってあきらかにされるからである⁽⁴³⁾。

⁽⁴¹⁾ 他の論書の生の定義は、BK-I 175–176、BK-II 252–254、BK-III なし、BK-IV 257–259、BK-V 92–94、BK-VI 119、PSkV 82.9–15 参照。

⁽⁴²⁾ 生相、老相などの特徴を命名することを意味する（1.1.5.1.4.2.24 の lakṣaṇāvasthāyām catvāraḥ を参照）。

⁽⁴³⁾ Cf. PSkV 83.15–84.12:

【反論】nanu ca bāhyasyāpi rūpasya jātijarāsthityanīyatāḥ santi. tat kimarthaṃ nikāyasabhāga eva saṃskārasantānasya jātyādaya uktāḥ, na bāhyasya rūpasyeti. 【答論】yānimāni bhagavatā saṃskṛtalakṣaṇānīty uktāni jātir jarā sthitiḥ anīyatā ca, tāni sattvākhyān eva saṃskārān ādhikṛtya (read adhikṛtya) na bāhyān iti jñāpanārtham.

【問】kasmāt punar bhagavatā ubhayeṣāṃ api tulye jātisattva upātān eva saṃskārān ādhikṛtya saṃskṛtalakṣaṇāny uktāni. 【答】bāhyam hi rūpaṃ saṃvartavivartaprabhāvitam, ādhyātmikās tu saṃskārā jātijarādiprabhāvitāḥ. etad uktaṃ bhavati, vināśotpāda bāhyasya rūpasya saṃvartavivartaśabdena loke prasiddhāv iti bhagavatāpi lokam anuvartamānena tathāivoktau, na jātyādiśabdena. ādhyātmikās tu saṃskārā jātijarādiprabhāvitāḥ, jātā jīrṇāḥ sthitā vinaṣṭā iti. teṣāṃ bhagavatāpi lokānurvṛtṭyotpādādayo jātyādiśabdena nirdiṣṭā iti.

【反論】だが、外界の色にも、生・老・住・無常性がある。それゆえ、なんのために、衆同分のみにおける諸行の相続にある生などが説かれ、外界の色にある〔生などが説かれ〕ないのか。【答論】生・老・住・無常性は、世尊によって「これらは有為の諸相」と説かれたところのものだが（Cf. AKBh 76.23–24）、それら〔有為の諸相〕は有情と呼ばれる（sattvākhyā）諸行のみに関して〔説かれたのであり〕、外界の〔色〕に関して〔説かれたの〕ではない、ということを知らしめるためである。

【問】では、両者ともに生〔など〕がある点が共通するのに、世尊が有執受の諸行のみに関して有為の諸相をお説きになったのはなぜなのか。【答】なぜならば、外界の色は、帰滅（saṃvarta）と生成（vivarta）によってあきらかにされる（prabhāvita）が、内的な諸行は、生や老などによってあきらかにされるからである。以下のことが説かれたことになる。世間では、外界の色の生と滅は、帰滅と生成の語によって周知されているから、世尊も世間に従って、全く同様にお説きになったのであって、生などの語をもって〔お説きには〕ならなかった。一方、内的な諸行は、「生まれた」「老いた」「生存（住）している」「亡くなった」というように、生・老などによってあきらかにされる。世尊もまた世間に従って、それら〔内的な諸行〕の生起などを、生などの語をもってお示しになったのである。

なお、ここで言及される prabhāvita の語については、Schmithausen [1969] をはじめとする先行研究で議論がなされており、金 [2007] によってまとめられている。また、Schmithausen [2014] ではさらなる検討がなされている。

1.1.5.1.4.2.8 老

【AS】 AS-Ms 5v1 (Gokhale 18.32) , ASVy-Ms 19r6–v1 (Li [2017: 234.8–9]) , cf. 早島 78.

Vy 19v1

jarā katamā. nikāyasabhāge saṃskārāṇāṃ prabandhānyathātve jareti prajñaptiḥ.

1.1.5.1.4.2.9 住

【AS】 AS-Ms 5v1 (Gokhale 18.32–33) , ASVy-Ms 19v1 (Li [2017: 234.10–11]) , cf. 早島 80.

sthitih katamā. nikāyasabhāge saṃskārāṇāṃ prabandhāvipraṇāśe⁽⁴⁴⁾ sthitir iti prajñaptiḥ.

1.1.5.1.4.2.10 無常性

【AS】 AS-Ms 5v1–2 (Gokhale 18.33–19.1) , ASVy-Ms 19v1 (Li [2017: 234.12–13]) , cf. 早島 80.

AS 5v2

anityatā katamā. nikāyasabhāge saṃskārāṇāṃ prabandhavināśe 'nityateti⁽⁴⁵⁾ prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v4–5 (Tatia 10.5–6) , ASVy-Ms 19v1–2 (Li [2017: 234.14–15]) , cf. 早島 81.

Vy 19v2
Bh 11v5

prabandhavināśo maraṇaṃ veditavyam.

ete ca jātyādayo na pratikṣaṇaṃ veditavyāḥ, kiṃ tarhi prabandhāvasthāsv iti.

⁽⁴⁴⁾ -praṇāśe] AS-Ms, -praṇāse ASVy-Ms.

⁽⁴⁵⁾ 'nityateti] ASVy-Ms, 'nityeti AS-Ms.

1.1.5.1.4.2.8 老

【問】老（老化）とは何か。【答】衆同分において、諸行の連続体⁽⁴⁶⁾が変異していくことに對して、「老」という名称がある⁽⁴⁷⁾。

1.1.5.1.4.2.9 住

【問】住（存続）とは何か。【答】衆同分において、諸行の連続体が消失しないことに對して、住という名称がある⁽⁴⁸⁾。

1.1.5.1.4.2.10 無常性

【問】無常性⁽⁴⁹⁾とは何か。【答】衆同分において、諸行の連続体が消失することに對して、「無常性」という名称がある⁽⁵⁰⁾。

「連続体が消失すること」とは、死ぬことであると理解されるべきである。

そして以上の生などは、刹那ごとに（刹那に関して）理解されるべきではなく、連続体の諸々の状態に関して〔理解されるべき〕である⁽⁵¹⁾。

⁽⁴⁶⁾ 連続体という訳に関して、PSkV 83.3–4 (tatrāntare hetuphalabhāvenāvasthitānām saṃskārānām nairantaryeṇotpādaḥ prabandha ucyate) 「その間に、因果関係によって存続している諸行が絶え間なく生起することが、連続体と呼ばれる」を参考にした。

⁽⁴⁷⁾ 他の論書における老の定義については、BK-I 179–180、BK-II 255–257、BK-III なし、BK-IV 263–265、BK-V 95–97、BK-VI 121、PSkV 83.1–8 参照。

⁽⁴⁸⁾ 他の論書における住の定義については、BK-I 177–178、BK-II 258–260、BK-III なし、BK-IV 260–262、BK-V 98–100、BK-VI 120、PSkV 83.9–11 参照。

⁽⁴⁹⁾ 無常性とは、死を意味する。

⁽⁵⁰⁾ 他の論書における無常性の定義については、BK-I 181–182、BK-II 261–263、BK-III なし、BK-IV 266–268、BK-V 101–103、BK-VI 122、PSkV 83.12–84.12 参照。

⁽⁵¹⁾ 以上に説かれた生・老・住・無常性は、刹那ごとの生・住・異・滅（いわゆる有為の四相）を指すのではなく、一有情の生涯における段階を指すと理解される。生・住・異・滅の有為の四相を有情の心相続のみに適用している理由は、AS が唯識無境の立場（外界の事物はみな心に還元される立場）に立っていることに基づくのであろうか。また「刹那ごと」に関して、AS の立場は、有為法に刹那減性を付与する毘婆沙師の立場よりも、むしろ付与しない經部師の立場（AKBh 76.20–77.2 参照）と共通する。毘婆沙師は有為の四相（あるいは三相）に関して、「有為〔法〕の有為相は三つである。三つとはなにか。有為の生起も知られ、滅も、住異性も知られる」という經典（本庄 [2014: 249–250 (no. 2061)]）の文言に基づいて、有為法にはこれら三つの性質があり、それらが刹那ごとに、法を生起させ、とどまらせ、滅ぼすのであるとして、有為法に刹那減性を付与する。一方で、經部師は經典の冒頭に注目し、「有為〔法〕の有為相は三つである」との文言で説明が始まることから、これらの三つの性質は刹那にあるのではなく、あくまで有為にある性質であると述べる。

1.1.5.1.4.2.11 名身

【AS】 AS-Ms 5v2 (Gokhale 19.1–2) , ASVy-Ms 19v2 (Li [2017: 234.16]) , cf. 早島 80.
 nāmakāyāḥ katame. dharmāṇāṃ svabhāvādhivacane nāmakāyā iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v5 (Tatia 10.7) , ASVy-Ms 19v2–3 (Li [2017: 234.17]) , cf. 早島 81.
 svabhāvādhivacanam cakṣuḥ śrotraṃ devo manuṣya ity evamādi.

Vy 19v3

1.1.5.1.4.2.12 句身

【AS】 AS-Ms 5v2 (Gokhale 19.2–3) , ASVy-Ms 19v3 (Li [2017: 234.18]) , cf. 早島 80.
 padakāyāḥ katame. dharmāṇāṃ viśeṣādhivacane padakāyā iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v5–6 (Tatia 10.8) , ASVy-Ms 19v3–4 (Li [2017: 234.19]) , cf. 早島 81.
 viśeṣādhivacanam sarvasaṃskārā anityāḥ sarvasattvā marīṣyantīty evamādi.

Bh 11v6
Vy 19v4

1.1.5.1.4.2.11 名身

【問】名身（名辞の集合）とは何か。【答】諸法の自性に関する言語的附託⁽⁵²⁾（*adhivacana* 増語）に対して、「名身」というという名称がある⁽⁵³⁾。

「自性に関する言語的附託」とは、「眼」「耳」「天」「人」等々である。

1.1.5.1.4.2.12 句身

【問】句身（文の集合）とは何か。【答】諸法特性（*viśeṣa*）⁽⁵⁴⁾に関する言語的附託に対して、「句身」という名称がある⁽⁵⁵⁾。

「特性に関する言語的附託」とは、「諸行は無常である」「一切の有情は死ぬであろう」等々である。

⁽⁵²⁾ 安慧による PSkV によると *adhivacana* は以下の様に説明される。Cf. PSkV 84.15–16:

dharmāṇāṃ svarūpasyānākhyeyatvād adhyāropya vacanam adhivacanam.

諸法の自性を指し示すことはできないから、附託して言い表すものが *adhivacana*（言語的附託）である。

また『俱舍論』には次のようにある。Cf. AKBh 144.1–2:

kiṃ kāraṇam adhivacanam ucyate nāma. tat kilāsyādhikam ālambanam ato 'dhivacanasamsparsā itī.

どうして言語的付託（*adhivacana*）が「名」（*nāman*）と呼ばれるのか。それは、これにはあまりに多い所縁（認識対象）が属するから、それ故に、言語的付託の接触というと伝え聞く。

⁽⁵³⁾ 他の論書の名身の定義は、BK-I 183–184、BK-II 243–244、BK-III 219–220、BK-IV 269–272、BK-V 86–87、BK-VI 123–124、PSkV 84.13–18 参照。

⁽⁵⁴⁾ ASBh によると「特性（*viśeṣa*）に関する言語的附託」は、文章を意味すると考えられる。いっぽう、PSkV によると *viśeṣa* は、いわゆる「述語」を意味し、次の様に説明される。Cf. PSkV 85.5–7:

viśeṣaḥ punar anityatādiko 'nuvṛttivyāvṛtṭyātmakaḥ. anyatrāvartamānam svabhāvaṃ viśiṇaṣṭīti viśeṣaḥ.

さらに *viśeṣa* とは、無常であることなどであり、随伴と排除を自体とするものである。よそにない自性を特定するから *viśeṣa* である。

⁽⁵⁵⁾ 他の論書の句身の定義は、BK-I 185–187、BK-II 246–247、BK-III なし、BK-IV 273–276、BK-V 88–89、BK-VI 125–126、PSkV 85.1–10 参照。

1.1.5.1.4.2.13 文身

【AS】 AS-Ms 5v2–3 (Gokhale 19.3–4) , ASVy-Ms 19v4, 6 (Li [2017: 234.21, 234.25–235.1]) , cf. 早島 80.

vyañjanakāyāḥ katame. tadubhayāśrayeṣv akṣareṣu vyañjanakāyā iti prajñaptiḥ.
 AS 5v3 vyañjanasya vyañjanatvaṃ⁽⁵⁶⁾ tadubhayābhivyañjanatām upādāya. varṇo 'pi saḥ,
 arthasaṃvarṇanatām upādāya. akṣaratvaṃ⁽⁵⁷⁾ punaḥ paryāyākṣaraṇatām upādāya.

【ASBh】 ASBh-Ms 11v6–12r3 (Tatia 10.9–15) , ASVy-Ms 19v4–6, 19v6–20r2 (Li [2017: 234.22–24, 235.2–5]) , cf. 早島 81.

Vy 19v5 **tadubhayāśrayeṣv** iti svabhāvaviśeṣādhivacanāśrayeṣv **akṣareṣu** a i u ity evamādiṣu.
 Bh 12r1 etāvac ca sarvaṃ yaduta svabhāvo viśeṣaḥ tadubhayavyavahāraś ca, tat sarvaṃ ebhir
 Vy 19v6 anuvyavahriyata ity evam⁽⁵⁸⁾ ete nāmapadavyañjanakāyā vyavasthāpitāḥ.

Bh 12r2 **paryāyākṣaraṇatām upādāyeti**⁽⁵⁹⁾ yathā cakṣuś cakṣur ity etasmāt paryāyād anyeṣv
 Vy 20r1 api netrākṣinayanalocanādiṣu paryāyāntareṣu kṣarati, tair api tatsaṃjñānāt. naivam a
 Bh 12r3 ity etad akṣaraṃ a ity etaṃ paryāyaṃ muktva paryāyāntareṇa śakyate jñāpayitum, ataḥ
 Vy 20r2 paryāyākṣaraṇād akṣaratvaṃ.⁽⁶⁰⁾ kṣaraṇaṃ⁽⁶¹⁾ punar gamanaṃ⁽⁶²⁾ veditavyam.

1.1.5.1.4.2.14 異生性

【AS】 AS-Ms 5v3 (Gokhale 19.5) , ASVy-Ms 20r2 (Li [2017: 235.6]) , cf. 早島 82.

prthagjanatvaṃ katamat. āryadharmāṇām apratilambhe prthagjanatvaṃ iti prajñaptiḥ.

⁽⁵⁶⁾ vyañjanasya vyañjanatvaṃ] ASVy-Ms, om. AS-Ms. Cf. 『集論』: 此言文者。

⁽⁵⁷⁾ akṣaratvaṃ] ASVy-Ms, akṣaraṃ AS-Ms. Cf. PSkV 86.5: akṣaratvaṃ.

⁽⁵⁸⁾ evam] ASVy-Ms, ata ASBh-Ms. Cf. ASBh-Tib. ASVy-Tib.: de'i phyir, 『雜集論』: 是故。

⁽⁵⁹⁾ paryāyākṣaraṇatām upādāyeti] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

⁽⁶⁰⁾ akṣaratvaṃ] ASVy-Ms, akṣarāṇi ASBh-Ms. Cf. ASVy-Tib.: 'gyur med nyid.

⁽⁶¹⁾ kṣaraṇaṃ] ASBh-Ms, akṣaraṇaṃ ASVy-Ms. Cf. ASVy-Tib.: 'gyur ba.

⁽⁶²⁾ gamanaṃ] ASBh-Ms, agamanaṃ ASVy-Ms. Cf. ASVy-Tib.: 'gro bar.

1.1.5.1.4.2.13 文身

【問】文身 (vyañjanakāya) とは何か。【答】その〔名身と句身〕両者のよりどころである諸音節 (akṣara) に対して、「文身」という名称がある⁽⁶³⁾。

文が文であることは、その両者を顕し示すもの (abhivyañjana) であることに基づく。またそれが字音 (varṇa) でもあるのは、意味を説示するもの (saṃvarṇana) であることに基づく。さらにまた、〔文が〕音節 (akṣara) であることは、〔表現〕様式 (paryāya) が交替不可能 (akṣaraṇa) であることに基づく。

「その両者のよりどころである〔諸音節〕に対して」とは、自性に関する〔言語的附託〕や特性に関する言語的附託のよりどころである諸音節 (akṣara) に対して、であって、「ア」「イ」「ウ」等々である。そして全ては、〔諸法の〕自性、特性、およびそれら両者についての言語表現に尽きるのだが、それら全ては、これら (諸音節) によってさらに言語表現される (anuvyavahriyate)。このように、これら名〔身〕・句〔身〕・文身が設定される⁽⁶⁴⁾。

「〔表現〕様式 (paryāya) が交替不可能 (akṣaraṇa) であることに基づく」とは、例えば、〔眼を意味する〕「チャクシュス (cakṣus)」「〔という名〕は、「チャクシュス」というこの様式とは別の、「ネートラ (netra)」「アクシ (akṣi)」「ナヤナ (nayana)」「ローチャナ (locana)」などの別の様式 (同義語, paryāya) に交替可能である (kṣarati)。それら〔別の様式〕によっても、それ (眼) を想起させるからである。これとは違って、「ア」というかかろ音節は「ア」というこの様式を離れて、他の様式によっては知らされることができない。このゆえに、様式が交替不可能 (akṣaraṇa) であるから、音節 (akṣara) である。また、「交替すること」とは、「変化すること」⁽⁶⁵⁾であると理解されるべきである。

1.1.5.1.4.2.14 異生性

【問】異生性 (凡夫であること) とは何か。【答】聖者の諸徳性 (dharma) を獲得していないことに対して、「異生性」という名称がある⁽⁶⁶⁾。

(63) 他の論書の文身の定義は、BK-I 188–189、BK-II 250–251、BK-III なし、BK-IV 277–280、BK-V 90–91、BK-VI 127、PSkV 85.11–86.12 参照。

(64) この一文を音節 (akṣara) に対する注釈と位置付けて理解したが、PSkV 86.8–12 にも類似表現がみられ、そこではその内容を名身・句身・文身の総括として位置付けている。ASBh では直後にも音節 (akṣara) に言及するため、総括とは理解しなかったが、PSkV と同様理解すれば以下のような訳になる。

そしてこの限り (自性、特性など) が全てである。すなわち、〔諸法の〕自性、特性、およびそれら両者を言語表現するものである。それら全てはこれら〔名身・句身・文身〕によってさらに言語表現される。それゆえに (ity ata)、これら名〔身〕・句〔身〕・文身が設定される。

(65) punar gamanaṃ に関しては、punargamaṇaṃ (再び変化すること) という複合語として解釈することも不可能ではないが、punar を接統語として理解する方が自然であると判断した。

(66) 他の論書の異生性の定義は、BK-I なし、BK-II 225–227、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 77–78、BK-VI なし、PSkV 86.13–87.3 参照。また小川 [1982] も参照。

1.1.5.1.4.2.15 流転

【AS】 AS-Ms 5v3 (Gokhale 19.5–6) , ASVy-Ms 20r2–3 (Li [2017: 235.8]) , cf. 早島 82.

Vy 20r3 pravṛttiḥ katamā. hetuphalaprabandhānupacchede pravṛttir iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 12r3–4 (Tatia 10.16–17) , ASVy-Ms 20r3 (Li [2017: 235.9–10]) , cf. 早島 83.

Bh 12r4 **prabandhānupacchede** pravṛttivyavasthānam ekasmin kṣaṇe vyavacchinne vā tadupacārābhāvāt.

1.1.5.1.4.2.16 定異

【AS】 AS-Ms 5v3 (Gokhale 19.6–7) , ASVy-Ms 20r3–4 (Li [2017: 235.11]) , cf. 早島 82.

Vy 20r4 pratiniyamaḥ katamaḥ. hetuphalanānātve pratiniyama iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 12r4 (Tatia 10.17–18) , ASVy-Ms 20r4 (Li [2017: 235.12–13]) , cf. 早島 83.

hetuphalanānātvam iṣṭasya phalasya sucaritam anīṣṭasya duṣcaritam ity evamādi phalānām prthak prthag anyonyahetukatvam.⁽⁶⁷⁾

⁽⁶⁷⁾ anyonyahetukatvam] ASBh-Ms, anyānyahetukatvam ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.2.15 流転

【問】流転（連続性）とは何か。【答】因果⁽⁶⁸⁾の連続体が途切れないことに対して、「流転」という名称がある⁽⁶⁹⁾。

連続体が途切れないことに対して〔のみ〕、「流転」〔という名称〕の設定がある。なぜなら、〔連続体の〕一刹那あるいは断絶したものに対しては⁽⁷⁰⁾、それ（流転）〔という名称〕を転義的に用いることがないからである。

1.1.5.1.4.2.16 定異

【問】定異（個別的定則⁽⁷¹⁾）とは何か。【答】因と果〔の対応関係〕が種々各別であることに対して、「定異」という名称がある⁽⁷²⁾。

「因と果〔の対応関係〕が種々各別であること」とは、望ましい果には善行〔という因〕があり、望ましくない〔果〕には悪行〔という因〕があるなどという、諸々の果がそれぞれにめいめいの〔対応する〕因を持つことである⁽⁷³⁾。

⁽⁶⁸⁾ hetuphala (因果) は、hetuphalaṃ という中性単数形で後に表記され、その場合は二通りの複合語理解が可能である。すなわち samāhāradvandva の場合は「因と果の総体」と理解でき、karmadhāraya の場合は「因でもあり果でもあるもの」と理解することもできる。いずれにせよ、この「因果」は「一切の有為法」を指す。これ以下の他の心不相応行の部分でも同様である。1.1.5.1.4.2.24 「心不相応行の総括」を参照 (hetuphalaṃ punar atra sarvaṃ saṃskṛtaṃ veditavyam)。

⁽⁶⁹⁾ 他の論書の流転の定義は、BK-I なし、BK-II 264–265、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 104–105、BK-VI なし、PSkV 87.4–5 参照。

⁽⁷⁰⁾ vyavacchinne を形容詞として理解しこのように訳したが、PSkV の prabandhoparama を参考にすると「〔連続体の〕断絶」という名詞で理解することも可能であろう。

⁽⁷¹⁾ 定異とは、果ごとに定まったそれぞれ異なる因があることを意味する。

⁽⁷²⁾ 他の論書の定異の定義は、BK-I なし、BK-II 266–267、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 106–107、BK-VI なし、PSkV 87.6–8 参照。

⁽⁷³⁾ この注釈は、因と果にそれぞれ対応関係があることを意味している。

1.1.5.1.4.2.17 相応

【AS】 AS-Ms 5v3–4 (Gokhale 19.7) , ASVy-Ms 20r4–5 (Li [2017: 235.14]) , cf. 早島 82.

yogaḥ katamaḥ. _△hetuphalānurūpye yoga iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 12r4–5 (Tatia 10.18–19) , ASVy-Ms 20r5 (Li [2017: 235.15–16]) , cf. 早島 83.

hetuphalasārūpyam, anyatve 'pi yad yasya phalaṃ yujyate. tadyathā dānasya
bhogasampad ity evamādi.

1.1.5.1.4.2.18 勢速

【AS】 AS-Ms 5v4 (Gokhale 19.7–8) , ASVy-Ms 20r5–6 (Li [2017: 235.16]) , cf. 早島 82.

javaḥ katamaḥ. _△hetuphalāśupravṛtttau java iti prajñaptiḥ.

1.1.5.1.4.2.19 次第

【AS】 AS-Ms 5v4 (Gokhale 19.8) , ASVy-Ms 20r6 (Li [2017: 235.17]) , cf. 早島 82.

anukramaḥ katamaḥ. hetuphalaikaikapravṛttāḥ⁽⁷⁴⁾ anukrama iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 12r5 (Tatia 10.20) , ASVy-Ms 20r6 (Li [2017: 235.18]) , cf. 早島 83.

ekaikatvena⁽⁷⁵⁾ pravṛttir ayugapatpravṛttir veditavyā.

⁽⁷⁴⁾ -phalaikaika-] em. cf. PSkV 87.12, -phalaikatya- AS-Ms, -phalaikadhya- ASVy-Ms, -phalaikatva- Gokhale. Cf. AS-Tib.: re re nas, 『集論』: 一一, ASBh: ekaikatvena.

⁽⁷⁵⁾ ekaikatvena] ASBh-Ms (tve は写本下部欄外における補筆) cf. PSkV 87.13, ekadhyena ASVy, ekaikasyaiva Tatia.

1.1.5.1.4.2.17 相応

【問】相応⁽⁷⁶⁾とは何か。【答】因と果の連関性 (ānurūpya) に対して、「相応」という名称がある⁽⁷⁷⁾。

〔「因と果の連関性 (ānurūpya)」とは〕因と果が連関すること (sārūpya)⁽⁷⁸⁾であり、〔因と果が〕別の事柄であるという関係性 (anyatva) においても、ある事柄が別のある事柄の結果として結びつく〔ことである〕。例えば、布施にとって富財の円満 (bhogasampad) 〔という果が連関する〕云々である。

1.1.5.1.4.2.18 勢速

【問】勢速 (素早さ) とは何か。【答】因果が素速く流転すること (āsupravṛtti)⁽⁷⁹⁾に対して、「勢速」という名称がある⁽⁸⁰⁾。

1.1.5.1.4.2.19 次第

【問】次第 (順番) とは何か。【答】因果が一つずつ〔順番に〕流転することに対して、「次第」という名称がある⁽⁸¹⁾。

〔「一つずつ流転すること」とは〕一つずつのものとして流転することであり、同時には流転しないことであると理解されるべきである。

⁽⁷⁶⁾ 相応とは、因と果が性質・様態の違うものであっても、両者に連関性があることを意味する。

⁽⁷⁷⁾ 他の論書の相応の定義は、BK-I なし、BK-II 268–269、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 108–109、BK-VI なし、PSkV 87.9–10 参照。

⁽⁷⁸⁾ sārūpya は通常「共通性」「類似性」などと訳されるが、ここでは内容に鑑みて「連関すること」と訳した。なお、この sārūpya について蔵訳・漢訳は*ānurūpya に相当する訳語を充てる (ASVy-Tib.: rjes su mthun pa, 『雑集論』: 相稱)。ただし ASBh-Tib. は mthun pa としている。

⁽⁷⁹⁾ 流転の定義については、本稿 1.1.5.1.4.2.15 を参照。

⁽⁸⁰⁾ 他の論書の勢速の定義は、BK-I なし、BK-II 270–271、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 110–111、BK-VI なし、PSkV 87.11 参照。

⁽⁸¹⁾ 他の論書の次第の定義は、BK-I なし、BK-II 272–273、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 112–113、BK-VI なし、PSkV 87.12–13 参照。

1.1.5.1.4.2.20 時

【AS】 AS-Ms 5v4 (Gokhale 19. 8–9) , ASVy-Ms 20r6–v1 (Li [2017: 235.20]) , cf. 早島 82.

Vy 20v1 kālāḥ katamaḥ. _△hetuphalaprabandhapravṛttau⁽⁸²⁾ kāla iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 12r5–6 (Tatia 10.20–22) , ASVy-Ms 20v1–2 (Li [2017: 235.21–236.1]) , cf. 早島 83.

Bh 12r6 hetuphalasya prabandhena⁽⁸³⁾ pravṛttau satyām, yat _△tatra hetuphalam utpanna-
Vy 20v2 niruddhaṃ so 'tītaḥ kāla iti prajñapyate, yad anutpannaṃ so 'nāgataḥ kālāḥ, _△yad
utpannāniruddhaṃ sa pratyutpannaḥ kāla iti.

1.1.5.1.4.2.21 方

【AS】 AS-Ms 5v4–5 (Gokhale 19.9–10) , ASVy-Ms 20v2 (Li [2017: 236.2–3]) , cf. 早島 84.

AS 5v5 deśaḥ katamaḥ. pūrvadakṣiṇapaścimottarādharordhvāsu⁽⁸⁴⁾ sarvato daśasu dikṣu _△hetu-
phala eva⁽⁸⁵⁾ deśa iti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 12r6–v1 (Tatia 10.23) , ASVy-Ms 20v2–3 (Li [2017: 236.4–5]) , cf. 早島 85.

Vy 20v3 hetuphalasya digvyāptau deśopacāraḥ. rūpasamgr̥hītaṃ cātra hetuphalaṃ veditavyam
Bh 12v1 arūpiṇām⁽⁸⁶⁾ _△digvyāpanasāmartyābhāvāt.

⁽⁸²⁾ -prabandhapravṛttau] AS-Ms, -prabandhena pravṛttau ASVy-Ms.

⁽⁸³⁾ hetuphalasya prabandhena] ASBh-Ms, hetuphalaprabandhena ASVy-Ms.

⁽⁸⁴⁾ -dakṣiṇapaścimottarādharordhvāsu] AS-Ms, -dakṣiṇottrapaścimādharordhvāsu ASVy-Ms.

⁽⁸⁵⁾ hetuphala eva] AS-Ms, hetuphale ASVy-Ms.

⁽⁸⁶⁾ arūpiṇām] ASBh-Ms, arūpiṇo ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.2.20 時

【問】時とは何か。【答】因果が連続して流転すること (prabandhapravṛtti) に対して、「時」という名称がある⁽⁸⁷⁾。

因果が連続して流転する場合に、そのうちの、すでに生起して滅してしまった因果は「過去時」と命名される⁽⁸⁸⁾。いまだ生起していない〔因果〕は「未来時」〔と命名される〕。すでに生起しおわってまだ滅していない〔因果〕は「現在時」と〔命名される〕。

1.1.5.1.4.2.21 方

【問】方(位置)とは何か。【答】東・南・西・北・下・上〔・四維⁽⁸⁹⁾〕といった、あらゆる十方における因果そのものに対して、「方」という名称がある⁽⁹⁰⁾。

因果が諸方角を占めることに対して⁽⁹¹⁾、「方」〔という名称〕を転義的に用いる。そしてこの場合の因果とは、色に摂められるものであると理解されるべきである。無色〔の諸法〕は、方角を占める能力を持たないからである。

⁽⁸⁷⁾ 他の論書の時の定義は、BK-I なし、BK-II 276–277、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 115–116、BK-VI なし、PSkV 88.1–4 参照。

⁽⁸⁸⁾ yat tatra hetuphalam utpannaniruddham so 'tītaḥ kāla iti prajñāpyate の tatra の解釈は難しい。AS は時一般について説明しており、ASBh は過去時・未来時・現在時についての説明を行なっているものと理解してこのように訳した。通常の文法理解に従うとこのような訳となる。しかしこの場合、hetuphala (Cf. fn. 68) が kāla の命名対象となってしまうため、pravṛtti を kāla の命名対象とする AS 本文の定義 (hetuphalaprabandhapravṛtttau kāla iti prajñāptiḥ) と齟齬する。この齟齬を回避するためには以下のことが考えられる。まず、hetuphala と hetuphalaprabandhapravṛtti の内実が同一であると解釈することである (但しその解釈が成り立つかについては慎重に論証する必要がある)。または、tatra が「流転」を指すと理解して、prajñāpyate の目的語と考えて当該の文を「因果がすでに生起して滅してしまった場合には、それ (流転) に対して過去時と名付けられる」と訳すことである (但し構文解釈に不自然さが残る)。あるいは tatra が「因果の連続」を指すと理解して「因果が連続して流転する場合に、それ (因果の連続) のうちの、すでに生起して滅してしまった因果」と訳することも可能である。目下、最終的な結論は得られていないため、その判断についてはひとまず保留しておきたい。

⁽⁸⁹⁾ 「四維」は漢訳によって補った。

⁽⁹⁰⁾ 他の論書の方の定義は、BK-I なし、BK-II 274–275、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 114、BK-VI なし、PSkV 88.5–8 参照。

⁽⁹¹⁾ digvyāptau については「占めることに対して」と訳した。その理由は、これまでの箇所において命名対象を処格で表示する構文がしばしば見られてきたからである。また、当該の「方」は、ASBh によると「因果が関係している状態」(hetuphalavyavasthā) であるとされるため (cf. 1.1.5.1.4.2.24)、それに合わせるならば上記のように「因果が諸方角を占めること」と訳すことができる。ただし、digvyāptau を「占める時に」と訳すことも不可能ではない。その場合、直接の命名対象は digvyāpti ではなく、hetuphala と理解することになる。そしてその理解は AS の文章表現 (hetuphala eva deśa iti prajñāptiḥ) と一致する。どちらの訳であっても内容に齟齬はない。

1.1.5.1.4.2.22 数

【AS】 AS-Ms 5v5 (Gokhale 19.10–11) , ASVy-Ms 20v3–4 (Li [2017: 236.6]) , cf. 早島 84.

Vy 20v4 saṃkhyā katamā. saṃskārāṇāṃ pratyekaśo bhede saṃkhyeti prajñaptiḥ.
△

【ASBh】 ASBh-Ms 12v1–2 (Tatia 10.24–25) , ASVy-Ms 20v4 (Li [2017: 236.7]) , cf. 早島 85.

Bh 12v2 **pratyekaśo bheda** ity⁽⁹²⁾ abhinnaikātmakatve dvitrisaṃkhyādy⁽⁹³⁾-anupapatteḥ.
△

1.1.5.1.4.2.23 和合

【AS】 AS-Ms 5v5 (Gokhale 19.11) , ASVy-Ms 20v4 (Li [2017: 236.8]) , cf. 早島 84.

sāmagrī katamā. hetuphalapratyayasamavadhāne sāmagrīti prajñaptiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 12v2–3 (Tatia 10.25–11.2) , ASVy-Ms 20v5–6 (Li [2017: 234.9–11]) , cf. 早島 85.

Vy 20v5 △ hetuphalapratyayānāṃ samavadhānaṃ tadyathā vijñānākhyasya⁽⁹⁴⁾ hetuphalasye-
Bh 12v3 ndriyāparibhedo⁽⁹⁵⁾ viśayābhāsagamaṇaṃ tajjāmanaskārapratyupasthānaṃ⁽⁹⁶⁾ cety
Vy 20v6 evaṃ anyatrāpi yojayitavyam.⁽⁹⁷⁾
△

⁽⁹²⁾ bheda ity] ASVy-Ms, bhede saṃkhyety ASBh-Ms.

⁽⁹³⁾ dvitrisaṃkhyādy-] ASBh-Ms, trisaṃkhyādy- ASVy-Ms.

⁽⁹⁴⁾ vijñānākhyasya] ASVy-Ms, vijñānākhyasya hi ASBh-Ms.

⁽⁹⁵⁾ -bhedo] ASBh-Ms, -bhede ASVy-Ms.

⁽⁹⁶⁾ tajjāmanas-] ASVy-Ms, tajñānamanas- ASBh-Ms, tajjñānaṃ manas- Tatia, tajjanakamanas- 佐久間. tajjanakaṃ manas- Kramer [2013: 1032] .

⁽⁹⁷⁾ yojayitavyam] ASBh-Ms ASVy-Ms 佐久間, yojitavyam Tatia.

1.1.5.1.4.2.22 数

【問】数とは何か。【答】諸行が一つずつ異なっていることに対して「数」という名称がある⁽⁹⁸⁾。

「(諸行が)一つずつ異なっていることに対して」というのは、異ならない単一の本性を持つ場合には、二や三などという数はあり得ないからである。

1.1.5.1.4.2.23 和合

【問】和合とは何か。【答】因果に関する諸条件が揃うことに対して、「和合」という名称がある⁽⁹⁹⁾。

「因果に関する諸条件が揃うこと」とは、例えば、因果が識と呼ばれる場合には、〔その因果に関して〕根が損傷していないことと、境が現前することと、それ(前の二条件)から生じる⁽¹⁰⁰⁾作意が現に起きていること〔という条件が揃うこと〕である。同様に〔識以外の〕他の場合にも適用されるべきである。

⁽⁹⁸⁾ 他の論書の数の定義は、BK-I なし、BK-II 278–279、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 117–118、BK-VI なし、PSkV 88.9–10 参照。

⁽⁹⁹⁾ 他の論書の和合の定義は、BK-I なし、BK-II 280–281、BK-III なし、BK-IV なし、BK-V 119–120、BK-VI なし、PSkV 88.11 参照。なお、『中観五蘊論』では、心不相応行として縁和合が説かれる。詳細については BK-VII 248–249 を参照。

⁽¹⁰⁰⁾ 採用した ASVy-Ms の *tajja* という語は、AS 27.16–17 や、『瑜伽論』の複数の箇所において、作意に係る形容句として確認される。ここでは *tat* が前の二条件(根と境)を指すものとして理解したが、その理解は『瑜伽論』「撰決択分」に見られる教説に沿うものであり(楊[2017]参照)、また、文法的にも素直な読み方といえる。但し、この ASVy-Ms の読みを採用する場合でも、世親の『縁起経釈』に見られるように、*tat* が *manaskāra* によって生ぜしめられる識を指すと解釈する例も存在する(室寺[2010]参照)。この解釈は漢訳やチベット語訳によっても支持され、また、ASBh-Ms に基づく佐久間[1996: 7]やKramer[2013: 1032]の訂正案は、そのことがより明確になる語形をとっている。恐らく両理解の間には教義的展開があると思われるが、ASBh が実際にどちらの意図で述べられているのかについて、この箇所だけで断定することは困難である。ここでは暫定的に、文法的に自然な前者の理解を採用した。

1.1.5.1.4.2.24 心不相応行の総括 (ASBh のみ)

【ASBh】 ASBh-Ms 12v3–5 (Tatia 11.3–8) , ASVy-Ms 20v6–21r2 (Li [2017: 236.12–17]) , cf. 早島 85.

ity evaṃ ete cittaviprayuktāḥ saṃskārā⁽¹⁰¹⁾ dharmāṇāṃ avasthāsu prajñāpanāt sarve
 prajñāptisanto veditavyāḥ.⁽¹⁰²⁾ tatra kuśalākuśalādyācayāpacayāvasthāyām ekaḥ, citta-
 caitasikāpravṛtṭyavasthāyām trayāḥ, sthityavasthāyām ekaḥ, sādṛśyāvasthāyām ekaḥ,
 lakṣaṇāvasthāyām catvāraḥ, vyavahārāvasthāyām trayāḥ, alābhāvasthāyām ekaḥ, hetu-
 phalāvasthāyām śeṣā iti. hetuphalam punar atra sarvaṃ⁽¹⁰³⁾ saṃskṛtaṃ⁽¹⁰⁴⁾ veditavyam.
 tato 'nyasyotpādād dhetuḥ, anyatas tadutpādāt phalam iti.

⁽¹⁰¹⁾ saṃskārā] ASVy-Ms, saṃskārāṇāṃ ASBh-Ms. Cf. PSkV 88.12, AS 本稿 1.1.5.1.4.2: cit-
 taviprayuktāḥ saṃskārāḥ.

⁽¹⁰²⁾ veditavyāḥ] ASVy-Ms Tatia, veditavyā ASBh-Ms.

⁽¹⁰³⁾ sarvaṃ] ASBh-Ms, om. ASVy-Ms.

⁽¹⁰⁴⁾ saṃskṛtaṃ] ASBh-Ms, saṃskṛtaṃm ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.2.24 心不相応行の総括 (ASBh のみ)

以上、これら心不相応行は、諸法の諸々の状態 (avasthā 分位) に対して命名するもの (prajñāpana) であるから、全て名称としての存在 (prajñaptisat 仮有) であると理解されるべきである⁽¹⁰⁵⁾。その中で「も特に」、善・不善などが増大したり減少したりしている状態に対しては一つ (得)、心心所が活動していない状態に対しては三つ (無想定・滅尽定・無想果)、「諸法が衆同分において」留まっている状態に対しては一つ (命根)、「有情の種類ごとの自己存在が」類似している状態に対しては一つ (衆同分)、「有情の生死などのあり方の」特徴が関係している状態に対しては四つ (生・老・住・無常性)、言語表現が関係している状態に対しては三つ (名身・句身・文身)、「聖者の諸徳性を」獲得していない状態に対しては一つ (異生性)、因果が関係している状態に対しては残余 (流転、乃至、和合) がある。なお、ここでの因果とは、一切の有為〔法〕のことであると理解されるべきである。〔つまり、〕それから他のものが生起することによれば〔それは〕因であり、他のものからそれが生起することによれば〔それは〕果である、ということである。

⁽¹⁰⁵⁾ Cf. PSkV 88.12–13:

evam ete cittaviprayuktāḥ saṃskārā dharmāṇām avasthāviśeṣeṣu prajñāpyanta iti prajñaptisanto veditavyāḥ.

このように、これら心不相応行は、諸法の特定の状態 (avasthāviśeṣa 分位差別) に対して命名されるので、名称としての存在 (prajñaptisat 仮設有) であると理解されるべきである。

dharmā と avasthā と prajñāpana は、それぞれ、1.1.5.1.4.2 心不相応行の adhiṣṭhāna, svabhāva, prajñapti に対応するものと考えられる。

略号および参考文献一覧

BK-I	Bauddhakośa I, See 斎藤ほか [2011] .
BK-II	Bauddhakośa II, See 斎藤ほか [2014] .
BK-III	Bauddhakośa III, See 榎本ほか [2014] .
BK-IV	Bauddhakośa IV, See 宮崎ほか [2017] .
BK-V	Bauddhakośa V, See 室寺ほか [2017] .
BK-VI	Bauddhakośa VI, See Saito et al. [2018] .
BK-VII	Bauddhakośa VII, See 宮崎ほか [2019] .
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
em.	emended
Gokhale	ゴーカレー本, See AS.
Ms	Manuscript
om.	omitted in
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
T	大正新脩大蔵経
Tatia	タティア本, See ASBh.
Tib.	Tibetan translation
佐久間	対タティア本コリゲンダ, See 佐久間 [1996] .
早島	早島本 (『インド大乘仏教瑜伽行唯識学派における聖典継承と教義解釈の研究』) , See AS.

一次資料

梵文

AKBh	<i>Abhidharmakośa-bhāṣya</i> . Ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AS(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya</i> . Ed. by V. V. Gokhale, “Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga,” <i>Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society</i> , New Series 23, 1947, pp. 13–38. 早島 理 『インド大乘仏教瑜伽行唯識学派における聖典継承と教義解釈の研究』, 平成 13 年度～平成 14 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (課題番号: 13610019) 研究報告書, 2003. Cf. ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharma Samuccaya of Asanga</i> , Visva-Bharati Studies 12, Santiniketan: Visva-Bharati, 1950. (For the Sanskrit manuscript, see Li [2013] [2014] [2015] [2016] [2017] [2018] [2019] , Li and Kano [2014]).
ASBh(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya-bhāṣya</i> . Ed. by Nathmal Tatia, <i>Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 17, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.

- See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] [2016] [2017] [2018] [2019], 佐久間 [1996] .)
- ASVy(-Ms) **Abhidharmasamuccaya-vyākhyā*. Tib. D (4054), P (5555).
See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] [2016] [2017] [2018] [2019], Li and Kano [2014] .)
- PSk *Pañcaskandhaka*. Ed. by Li Xuezhong and Ernst Steinkellner with a contribution by Toru Tomabechi, *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Beijing: China Tibetology Publishing house; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.
- PSkV *Pañcaskandhaka-vibhāṣā*. Ed. by Jowita Kramer, *Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā*, Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013.
- YBh *Yogācārabhūmi*.
VinSg *Viniścayasamgrahaṇī*. Tib. D (4038), P (5539).

漢訳

- 『瑜伽論』 『瑜伽師地論』 弥勒菩薩説, 玄奘訳. T [30] (1579).
『顯揚論』 『顯揚聖教論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1603).
『集論』 『大乘阿毘達磨集論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1605).
『雜集論』 『大乘阿毘達磨雜集論』 安慧菩薩糅, 玄奘訳. T [31] (1606).

二次資料
(欧文)

Kramer, Jowita

- [2013] “A Study of the *Samskāra* Section of Vasubandhu's *Pañcaskandhaka* with Reference to Its Commentary by Sthiramati,” *The Foundation for Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, ed. by Ulrich Timme Kragh, Harvard Oriental Series 75, Cambridge (Massachusetts): Harvard University Press, pp. 986–1035.

Li, Xuezhong 李 学竹

- [2013] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga's *Abhidharmasamuccaya* —Folios 1, 15, 18, 23, 24—,” *Annual Report The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* (= ARIRIAB) 16, pp. 241–253.
- [2014] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga's *Abhidharmasamuccaya* —Folios 29, 33, 39, 43, 44—,” ARIRIAB 17, pp. 195–205.
- [2015] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* —Folios 2v4–8v4—,” ARIRIAB 18, pp. 275–283.

- [2016] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharma-samuccayavyākhyā* —Folios 8v4–18r1—,” ARIRIAB 19, pp. 217–231.
- [2017] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharma-samuccayavyākhyā* —Folios 18r1–23v4—,” ARIRIAB 20, pp. 231–240.
- [2018] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharma-samuccayavyākhyā* —Folios 23v4–29r6—,” ARIRIAB 21, pp. 299–307.
- [2019] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharma-samuccayavyākhyā* —Folios 29r6–35b1—,” ARIRIAB 22, pp. 217–226.
- Li, Xuezhong 李 学竹 and Kano, Kazuo 加納 和雄
- [2014] “Restoration of Sanskrit text in missing leaves (fols. 2, 6, 7) of the *Abhidharma-samuccaya* manuscript on the basis of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* manuscript,” *China Tibetology* 23, pp. 53–63.
- Saito, Akira 斎藤 明 et al.
- [2018] *The Seventy-five Elements (dharma) of Sarvāstivāda in the Abhidharmakośa-bhāṣya and Related Works, Bauddhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences, Volume VI*, Studia philologica Buddhica Monograph Series 37, Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies of The International College for Postgraduate Buddhist Studies.
- Schmithausen, Lambert
- [1969] *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Vinīścayasamgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Sitzungsberichte, 264. Band, 2. Abhandlung, Wien: Hermann Böhlau Nachf.
- [2014] *The Genesis of Yogācāra-Vijñānavāda: Responses and Reflections*, Kasuga Lectures Series 1, Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies of The International College for Postgraduate Buddhist Studies.
- (和文)
- 阿毘達磨集論研究会
- [2015] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(1)」『インド学チベット学研究』19, pp. 57–96.
- [2016] 「梵文和訳『阿毘達磨雜集論』—安慧による冒頭偈—」『インド学チベット学研究』20, pp. 24–52.
- [2017] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(2)」『インド学チベット学研究』21, pp. 55–86.
- [2018] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(3)」『インド学チベット学研究』22, pp. 27–57.
- [2019] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(4)」『インド学チベット学研究』23, pp. 27–74.
- 榎本 文雄 ほか
- [2014] 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語 —仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— バウダコーシャ III』インド学仏教学叢書 17, 山喜房佛書林.
- 小川 宏
- [1982] 「異生性論考」『印度学仏教学研究』30-2, pp. 862–865.

金 才権

- [2007] 「唯識文献における prabhārita の語義 — 『中辺分別論釈疏』を中心として—」『印度学仏教学研究』55-2, pp. 75-78.

斎藤 明 ほか

- [2011] 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集 — 仏教用語の用例集 (パウツダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林.
- [2014] 『瑜伽行派の五位百法 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ II』インド学仏教学叢書 16, 山喜房佛書林.

佐久間 秀範

- [1996] 『タティア校訂版『阿毘達磨雜集論』梵語索引およびコリゲンダ』山喜房佛書林.

那須 (櫻井) 良彦

- [2001] 「瑜伽行派における衆同分」『龍谷大学佛教学研究年報』11, pp. 53-75.
- [2007] 「俱舍論根品心不相応行論 — 世親本論と諸註釈の和訳研究 (2)」『インド学チベット学研究』11, pp. 76-117.
- [2008a] 「俱舍論根品心不相応行論 — 世親本論と諸註釈の和訳研究 (1)」『浄土真宗総合研究』3, pp. 113-128.
- [2008b] 「俱舍論根品心不相応行論 — 世親本論と諸註釈の和訳研究 (3)」『インド学チベット学研究』12, pp. 67-95.
- [2010] 「俱舍論根品心不相応行論 — 世親本論と諸註釈の和訳研究 (4)」『インド学チベット学研究』14, pp. 48-88.
- [2011] 「俱舍論根品心不相応行論 — 世親本論と諸註釈の和訳研究 (5)」『インド学チベット学研究』15, pp. 68-96.
- [2012] 「俱舍論根品心不相応行論 — 世親本論と諸註釈の和訳研究 (6)」『インド学チベット学研究』16, pp. 58-87.
- [2013] 「俱舍論根品心不相応行論 — 世親本論と諸註釈の和訳研究 (7)」『インド学チベット学研究』17, pp. 32-62.

早島 理

- [1992] 「瑜伽行学派における「得 prāpti」」『長崎大学教育学部社会科学論叢』44, pp. 1-19.

堀内 俊郎

- [2018] 「仏教用語再訪 — aprasaṅga, calita, 所依—」*Buddhakośa Newsletter* 7, pp. 23-27.

本庄 良文

- [2014] 『俱舍論註ウパーイカーの研究』(上・下) 大蔵出版.

宮崎 泉 ほか

- [2017] 『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ IV』インド学仏教学叢書 20, 山喜房佛書林.
- [2019] 『『中観五蘊論』の法体系 五位七十五法対応語を除く主要術語の分析 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ VII』インド学仏教学叢書 24, 山喜房佛書林.

室寺 義仁

- [2010] 「ヴァスバンドゥの注意力 (manaskāra) 解釈 — 識別 (vijñāna) 成立のための三要件 —」『インド論理学研究』1, pp. 213–222.

室寺 義仁 ほか

- [2017] 『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 — パウツダコーシャ V』インド学仏教学叢書 21, 山喜房佛書林.

楊 潔

- [2017] 「『瑜伽師地論』における tajjo manaskāraḥ 再考」『印度学仏教学研究』65-2, pp. 154–157.

吉元 信行

- [1989] 「心不相応行の大乘アビダルマ的分析」『大谷学報』68-2, pp. 29–44.

Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (5)

Summary

This paper is a continuation of “Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (4)”, which intends to revise the Sanskrit texts of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya*, and to make a Japanese translation of them.

This paper gives translation to a part of the establishment (*vyavasthiti*) of the *saṃskāra-skandha* in the first *tridharma* chapter of the first part, i.e., the *maula* part. This part enumerates and defines twenty-three conditioned forces dissociated from mind (*cittaviprayukta-saṃskāra*) such as acquisition (*prāpti*).

The translation was done by Abhidharmasamuccaya Study Group: Yoshihiko Nasu prepared a working translation and annotations, then Kazuo Kano and all other members examined and revised them. Li Xuezhong gave us a full cooperation in editing and revising the Sanskrit texts included in this paper.

- Leader: Yoshihiko Nasu (Social Welfare Corporation Kongojushinkai)
 Members: Kazuo Kano (Komazawa University)
 Li Xuezhong (China Tibetology Research Center)
 Akira Yoshida (Ryukoku University)
 Shun'ei Matsushita (Otani University)
 Satoshi Hayashima (Ryukoku University)
 Takeshi Yokoyama (Gifu University)
 Yuki Takatsukasa (Ryukoku University)
 Mitsuru Kenchu (Ryukoku University)
 Takanori Fukita (Bukkyo University)
 Hironori Tanaka (Bukkyo University)
 Minoru Okuno (Ryukoku University)
 Keiki Nakayama (JSPS Research Fellow, DC2)
 Yasumichi Mukaida (Otani University)

(Synopsis)

- 1.1.5.1.4.2 *cittaviprayuktāḥ saṃskārāḥ*
- 1.1.5.1.4.2.1 *prāpti*
- 1.1.5.1.4.2.2 *asaṃjñīsamāpatti*
- 1.1.5.1.4.2.3 *nīrodhasamāpatti*
- 1.1.5.1.4.2.4 *āsaṃjñika*
- 1.1.5.1.4.2.5 *jīvitendriya*
- 1.1.5.1.4.2.6 *nikāyasabhāga*
- 1.1.5.1.4.2.7 *jāti*
- 1.1.5.1.4.2.8 *jarā*
- 1.1.5.1.4.2.9 *sthiti*
- 1.1.5.1.4.2.10 *anityatā*
- 1.1.5.1.4.2.11 *nāmakāya*
- 1.1.5.1.4.2.12 *padakāya*

- 1.1.5.1.4.2.13 *vyañjanakāya*
- 1.1.5.1.4.2.14 *prthagjanatva*
- 1.1.5.1.4.2.15 *pravṛtti*
- 1.1.5.1.4.2.16 *pratiniyama*
- 1.1.5.1.4.2.17 *yoga*
- 1.1.5.1.4.2.18 *java*
- 1.1.5.1.4.2.19 *anukrama*
- 1.1.5.1.4.2.20 *kāla*
- 1.1.5.1.4.2.21 *deśa*
- 1.1.5.1.4.2.22 *saṃkhyā*
- 1.1.5.1.4.2.23 *sāmagrī*
- 1.1.5.1.4.2.24 Summary of *cittaviprayuktāḥ saṃskārāḥ* (only in ASBh)

キーワード *Abhidharmasamuccaya*、『阿毘達磨集論』、『阿毘達磨雜集論』、無着、安慧